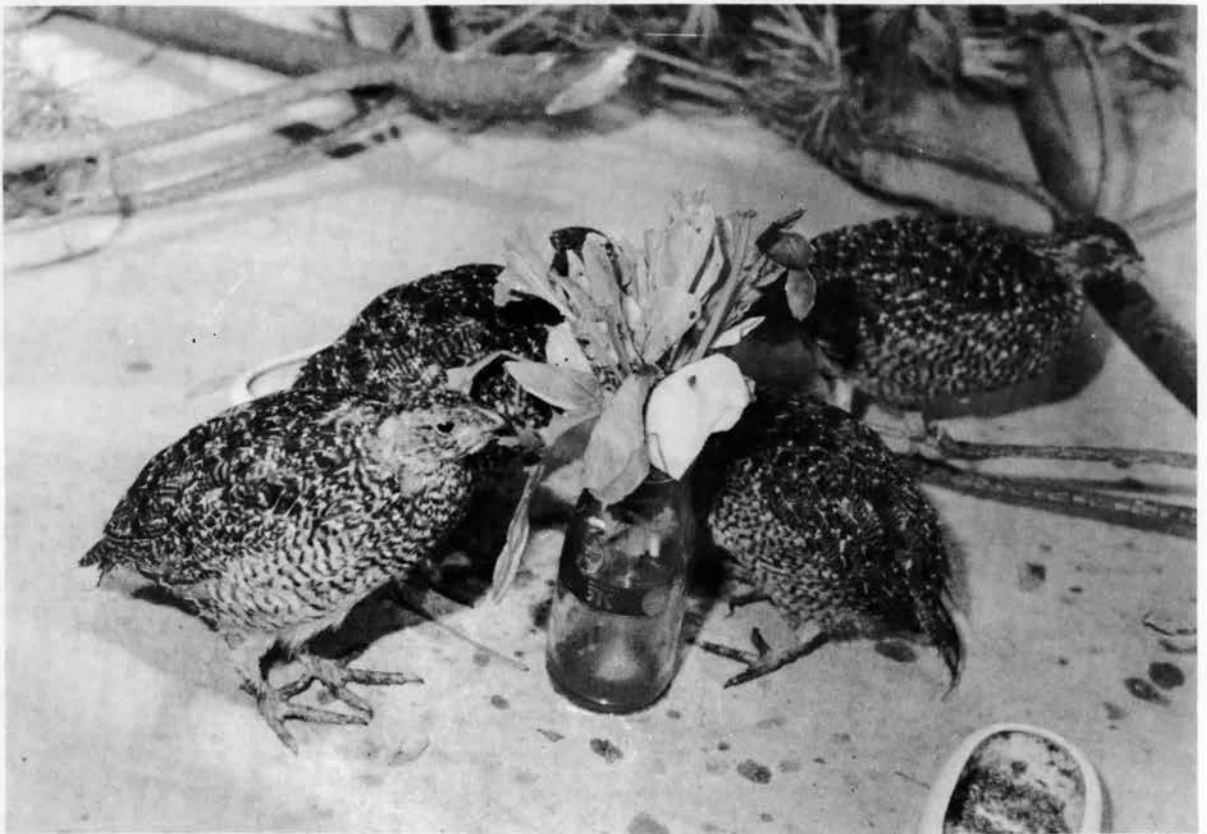


山と博物館

第20巻 第8号

1975年8月25日

大町山岳博物館



人工化したライチヨウのヒナ (8月13日撮影)

撮影 荒井 今朝一

残暑雑感

山岳博物館が特別天然記念物ライチヨウの低地増殖事業をはじめたのは昭和38年、最近一年半ほど中断されたものの、その間にフ卵室、人工気候室などの建設、整備が進められていた。

今年7月北アで採卵された6個のライチヨウ卵のフ化に成功し、8月20日現在順調に生育している。

今まで低地で人工増殖の研究が進められる中で、何羽かが死亡していった。

それは生来生育している高山の気候と低地の気候との違いや、環境の衛生面、人工的な飼育環境によるストレスなど種々の要因が考えられる。

低地での最長飼育日数は3年2カ月である。人工気候室の中で今年のヒナは順調すぎるくらいに順調にいつている。

飼育担当スタッフの努力と苦労はそれ相当のものではある。しかしそれは博物館の職員であるからあたりまえのことといってしまうば、それまでであるが、それを支えている表面にでない多くの方々の熱意と努力を抜きにしては考えられない。

ライチヨウの低地での人工飼育という、新しい分野での仕事では、次々とそれこそ思いもよらない新しい問題が起ってくることは必定である。

その壁を突破するためには、今までの長い間の飼育経験とそれぞれの専門的立場にある方々の力が大きくものをいうものと思う。

ここではご支援いただいている方々の氏名を列記するいとまがないので厚く謝意を表すにとどめる。

この事業として、そう／＼予算が潤沢にあるわけではない。限られた予算を有効に使用するのには当然のことではあるが、それに加えて人為的工夫、ご支援いただいている方々のご好意と熱意に甘えなければならぬ面も多々でてくる。しかし、ものごとには限界というものもあると感ずる今日この頃でもある。

(グチ猿)

大正二年のウエストン

三井嘉雄

明治二十一年にはじめて来日したウォルター・ウエストンは、四十四年には、フランセス夫人を伴って日本に二度目の滞在をしていました。

そして翌年、大正と改元された、八月十四日には有明山に登り、十五日には、夫人とともに燕岳に登ったのであった。この山行についてウエストンは、『極東の遊歩場』の中で、夫人が登ったことについての記述を全くしていないが、大正元年八月にウエストンが中房温泉の百瀬玄三松に宛てた英文の手紙に



中房温泉でウエストンが夫人を相手にビールを飲んでいるところを別棟の2階から石田吟松氏がスケッチしたもの(山岳第56号より)

は記されている。それによると、中房温泉には十三日から十六日まで宿泊し、「この二つの山は、外人によるはじめての登山がなされました。そして私たちは、それが多くの注目にふさわしいものと考えます。」といっている。おそらく燕岳へは女性としての初登頂でもあろう。このとき有明山と燕岳に同行した石田吟松によると、夫妻はカタコトの日本語を話し、ウエストンはロッキンショウウジョウといいながら登ったといっている。

さらに、ウエストンは十九日に東北面から槍ヶ岳を征服して、上高地の清水小屋で、嘉門次と実に十八年ぶりの旧交を暖めたのであった。その二、三日後には嘉門次をつれて、岳沢から奥穂高岳への直登をやつてのけた。この年は、上高地へは夫人は来なかつたようである。『極東の遊歩場』によると、「次の年には奥様を彼(嘉門次)の住居にお連れいただき、彼と一緒に、今まで女性が登ったことのない大きな山々の神祕を探索して下さるようになる。」(岡村精一訳)と嘉門次が約束させたのであった。

明く大正二年、ウエストン夫妻は八月になると、上高地の清水小屋に三週間滞在した。大正二年というところ、北アの探検登山が一応終わつて、縦走登山が盛んになりだした頃である。木暮理太郎と田部重治が槍ヶ岳から剣岳まで案内者なしで縦走したのも、この年のことであつた。

ウエストンは五十三歳、嘉門次が六十七歳で、上高地に滞在中に槍ヶ

岳、奥穂高岳、霞沢岳、焼岳などに夫妻で登つたのである。前年にひき続いて、妙義山の案内人根本清蔵も同行していた。ただウエストンの記録には日付けが記されていないため、正確な登山の日どりがわかっていない。島々から徳本峠に向かった日のことについてはウエストンは「清蔵と嘉門次、そして彼の頑丈な息子の嘉代吉—この人は二十五歳位に見えたが、実際は四十三歳だつた—と一緒に、早朝の冷えびえした爽やかなさに包まれながら、あの美しい溪谷の道をもう一度登り進んだ。」として記している。

話は飛ぶが、同じ年の八月に鳥帽子岳から槍ヶ岳をまわつて上高地に下つた、百瀬慎太郎の一行は、島々で、上高地に向うウエストンと同宿したのだつた。「徳本峠を島々に下りて清水屋の本店に憩んだ時、嘉門次君の息子の嘉代吉君がこれからウエストンさんの案内で穂高へ行くのだと報らせてくれたので、思わずハッとして、吾が日本アルプスの恩人である偉人に接してみたい気持ちになつたのである。刺を通すや、間もなく二階から巨魁をスズンズンと階段を降りて来たウエストン氏は、いきなり私の手を握つて、ペラペラと話しかけてきた。悲しい哉英語が解らない。「山を想へば」と描写されている。百瀬は八月十五日に硫黄沢乗越(そのころゴートの野陣場と呼ばれていた)に泊つたことは確実なので、十六日に上高地に下り、翌日は焼岳に登つたから、ウエストンと会つた日は八月十八日ということになる。したがつて、ウエストンが島々から上高地へ出発したのは八月十九日と推察される。

上高地からは、ウエストン夫妻はまず槍ヶ岳から登つた。そのコースは前年と同じく槍の北面からで、坊主の岩小屋から東鎌尾根を越えて水俣側を下り、遅くまで残雪の残る谷(間ノ沢と考えられる)から登つたものである。普通のルートよりは一、二時間余計にかかること記している。もちろん、女性による槍

ヶ岳の初登はんの記録でもある。

槍ヶ岳から上高地に帰つたウエストンは忙しかつた。「極東の遊歩場」によれば、「上高地は、また来てわかつたのだが、多種多様の訪問者の洪水で溢れていた。私たちは彼等の多くと非常に興味深くおつきあひをした。近くでその時絵を描いていた画家が数人、彼らの私見を述べる催しに、われわれを招いてくれた。そして、彼らの骨折りでできた、心のうっとりするような作品を若干土産にもらつて帰つた。東京高等師範学校の学生三十人の一隊が、これは並はずれて愉快な若者連中だつたが、彼らの日本アルプス登山について、私の意見を述べてもらいたいと言つた。一方、長野の大きな学校の校長が、信州山岳クラブのほかの五、六人の会員と一緒に、同じ種類の話をしにやつて来た。」となつてゐる。

数人の画家というのは、高村光太郎、茨木猪之吉、真山孝治、窪田空穂、谷紀三郎という、当時としてはそうそうたる文化人メンバーであつた。

高村高太郎は白骨温泉から上高地に来ていて、茨木も窪田も、上高地で偶然にいつしよになつたのであつた。八月十三日には、茨木がその人たちの似顔を、たむれに写生している。この年、高村は九月まで上高地に滞在して、八月の終り頃になると智恵子が絵を持って高村のところへやつて来た。二人はその年上高地で婚約したのであつた。「智恵子の半生」の中で、高村光太郎は、「私は穂高、明神、焼岳、霞沢、六白山、梓川と触目を悉く画いた。彼女は其の時私の画いた自画像の一枚を後年病臥中でも見ていた。その時ウエストンから彼女の事を妹さんか、夫人かと問われた。友達ですと答へたら苦笑して、「と述べている。そして高村は、その間に焼岳に登つたが、靴は足に当るといつて下駄で登つたのだつた。この時上高地で写生した高村の作品は、岸田劉生や木村荘八などと催した生活社の展覧会に出品されている。

茨木猪之吉は、当時すでに山岳画家として名をなしていた。この年、二十日ばかりで剣岳から縦走してきた近藤茂吉が、上高地で茨木に出会って、案内の佐伯平蔵を茨木に紹介した。近藤が上高地から下る前夜のことに、茨木猪之吉は次のように記している。

「今日は最後の日で、山幸を祝ふ為めゴヘイ餅を作って山の神に納め、共に祝ふのだぞうだ。恰度清水屋に滞在してゐた高村光太郎氏も、浴衣がけで散歩にみえた。早速平蔵君の作られたゴヘイ餅に味噌をつけて、太い串にさして焼いたのを一本御馳走になる。」

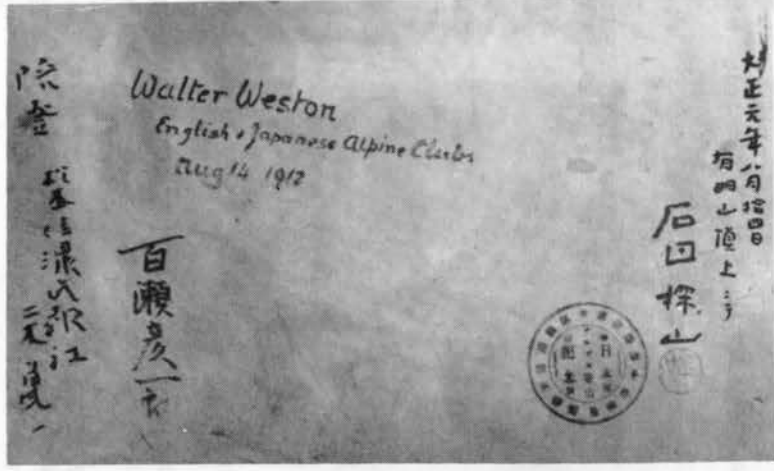
「山旅の素描」

茨木は平蔵について、「私の山旅案内者として、一番印象が深いので、」として、そのち剣岳などに同行している。また、ウエストンが翌三年七月に、日本での最後の山行で立山から針ノ木峠を越した時には、「ここで、友人の近藤茂吉という日本山岳会の卓越した写真登山家のお世話で、芦峠の佐伯平蔵と言う一人の頑丈な強力が、私を待っていてくれた。」としているところをみると、近藤も上高地でウエストンに会ったのかも知れない。高村と茨木は、すでにウエストンと面識があったということである。

茨木猪之吉は、小諸の小学校で若山牧水とともに代用教員をしており、小諸時代の島崎藤村の作品「水彩画家」のモデルでもあった。また、第二次大戦中に上高地のウエストンのブロンズ像を守るため、昭和十七年の暮、吹雪の中を胸像をとりはずしに行ったのは、茨木猪之吉と穂苅三寿雄であった。それから、歌人の窪田空穂はその夏のウエストンとの出会いを、「田代沼明神の池」として書いている。「もし、もし、という高い訛りのある声に驚かされて、互に顔を見合つた。それは驚か

室にいるウエストンという外国宣教師の声であることがわかつた。その人は、夫人が病氣をして寝ているが、我々の話し声で眠ることができない、遠慮してくれ、と要求するのであった。」

窪田は続けてウエストンについて、「今年夫人と一緒に常念へ登ろうと計画して来たのであるが、旧知の嘉門次の小屋へ招かれて、梓川を徒渉して行つたために夫人は風邪を引いてしまつて寝ているのだ、ということを知っていた。」と説明している。常念というのは槍ヶ岳か穂高岳の間違ひであろう。いずれにしても、ウエストンは前の年の嘉門次との約束



石田探山(後に吟松)氏のスケッチ帖のウエストンのサイン

を果したのであった。窪田空穂も、この年槍ヶ岳に登つてゐる。たまたま同じ日に清水屋に泊つていて、ウエストンの呼びかけを聞いた一群があつた。一高山岳会の一行である。その中の一人、山口成一によると、夜さわいでいるところへ、「明日、わたし、槍ヶ岳へ登ります。みなさん、山を愛します。どうか静かにして下さい。」(「山」第二巻第一号)といわれて恐縮している。

さらに、一高山岳会の大木操は八月七日に河童橋でウエストン夫妻に会つて、写真を撮影し、前記「山」に掲載されている。この写真でみると、ウエストンは登山靴をはいたところへワラジもつけ、荷物を背負つた嘉門次と根本清蔵も写つている。これは「極東の遊歩場」に載つたウエストン夫人撮影の写真と服装が一致する。そのウエストン夫人はロングスカートである。

のちに大木が、「ウォルター・ウエストン夫妻を偲ぶ」に記したところによれば、「私たちが若い学生らを、人なつかしうに優しく応対してくれた。」と回想している。大木操はのちに貴族院議員や、東京の副都知事を歴任した人である。

ところで、大木がウエストンを撮影した日付けのことであるが、八月七日が正しいとすると、これがウエストンが槍ヶ岳に出発した日か、帰つて来た日だと推察される。おそろくウエストンは、六日か七日に槍ヶ岳に出発し、七日か八日は、は槍ヶ岳に登つたはずである。さきの百瀬慎太郎の記録からすると、ウエストンが上高地に入ったのが八月十九日ということになる。そしてウエストンは三週間



雪原上に行く、先頭嘉門次、ウエストン夫人、根本清蔵 犬は嘉門次の愛犬「ロゾー」

の滞在で、九月に上高地で智恵子にも会つてゐる。

一高山岳会は、大正二年には燕岳―常念岳―槍ヶ岳―上高地を四班に分けて登り、上高地からは前穂高と焼岳に登つてゐる。第一班は七月二十二日に中房を出発し、第二班は二十四日、第三班は二十八日、第四班は八月一日だった。各班とも七人から九人であったが、上高地での滞在は重なつてゐる。「一高山岳会団体旅行概況」をみると、上高地で第一班と第二班が合流して、「第一班の健児等、之(第二班)を河童橋畔に迎え、万才を高唱し、

夜は両班合併して大コンパを開く。」などとある。大木操は第四班の班長であり、第四班は八月四日に上高地に着いて滞在している。それらを考えあわせると、ウエストンの明日槍ヶ岳へ登るといふ日は、八月六日と考えて間違いないまい。第二班の中には川島録郎もふくまれていた。

それから、ウエストンが学生三十人と記した東京高等師範学校附属中学校山岳会は、八月九日に燕岳に登り、十一日に槍ヶ岳から上高地に着いて十六日ごろまで清水屋に滞在していた。メンバーの中には、大正五年に槍ヶ岳を始めて逆縦走に成功した伴野清がいた。

河野齡蔵の一行も上高地でウエストンに会った。ウエストンが、長野の大きな学校の校長とその一行、と記録している人々である。河野は七月下旬から約一週間、信濃山岳研究会の主催による燕・大天井・槍の縦走に、植物採集の指導をして登ったのであった。河野は、ウエストンが槍ヶ岳に登った時、ロープを使用したと聞いている。

「極東の遊歩場」の中で、ウエストンはさらに続けて記した。

「しかしながら、私たちが親しみ深く訪ねてくれたすべての人々のうちで一番楽しかったのは、東京帝国大学の一番有名な代表的学者、大森房吉博士だ。ちょうどその時、彼は焼岳の状態を調査していた。」

焼岳は明治の末から爆発をくり返して、大森は大正二年には、焼岳の爆発の調査に来ていたのであった。その年の九月十五日付の信濃毎日新聞には、大森の焼岳の状況報告を掲載している。ウエストンに会った大森房吉は、焼岳と浅間山が交互に爆発することについて、両山が地下で火山脈が繋がっているためではないかと説明したという。

ウエストン夫妻は、それから焼岳と霞沢岳にも登った。霞沢岳へは、「温泉宿から正面に見える長いガリを登った。」と記録され

ているから、下八右衛門沢を登ったものであろう。そして、夫妻は上高地から安房峠を越えて平湯に出て、蒲田から中尾峠経由で再び上高地に戻った。

上高地では、上条嘉門次が梓川に飛び込むはめになった。当時、上高地では牛が放牧されていたが、そのうちの一匹が、はじめウエストン夫妻をおそっているとこへ嘉門次がやって来た。「けれども、嘉門次の方が、素早く思いつづが早いのか、たちまち行動した。彼は一瞬のうちに、その動物の驚いたことに、魚、釣道具そのほかすべて諸共に梓川に飛び込んだのである。」というわけで、「獣を追う猟師としてでなく、獣に追われる者として、濡れぬずみで梓川からはい上って来たのだった。」

八月二十九日には、(この日付けはウエストンが記している)ウエストンは上高地から奥穂高岳を往復した。ウエストン夫人、根本清蔵、それに嘉門次が同行した。一行は、前年ウエストン自身が直登したルートをたどって、岳沢から南稜を通って奥穂高に達したものである。当時の奥穂高は、前穂高と比べてほとんど登る人もまれな山頂であった。ウエストン夫人は、奥穂高でも最初の女性登山者となった。

このあと徳本峠から松本に下ったウエストン夫妻は、白馬岳にも登った。明科から馬車で大町に着いたウエストンは、対山館に立ち寄り、「この旅館の精力的な若い当主の百瀬慎太郎は熱心な登山家で、私はこの人の山なかで既に会ったこともある。」と述べている。そして対山館に十九年前に来たときには、ヤマチョーといっていたことも記している。

四ツ家から白馬岳に出発した日が二十日だったから、九月一日か二日のことであろう。

(「山と溪谷」通信員)

中国へ贈られたカモシカ

北京動物園からのたより

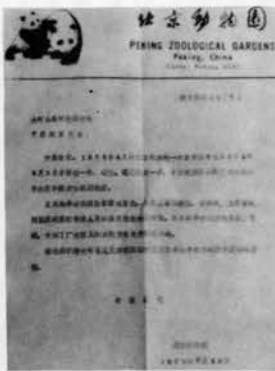
編集部

昭和48年4月3日、中国の北京動物園に旅立って行ったニホンカモシカ、太郎・辰子の近況が8月1日北京動物園より知らされました。文面は中国語で続られていますが、日本語になおしますと次のようです。

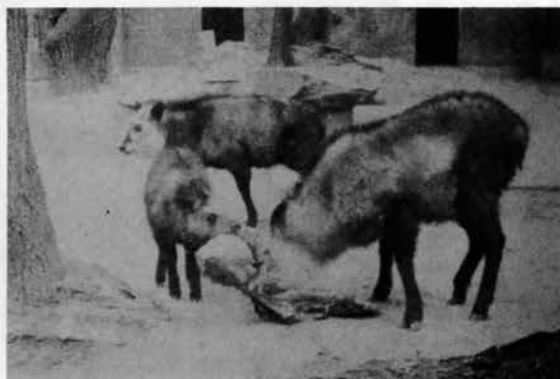
「お手紙有難く拝承しました。一九七三年四月、東京経由で参りましたニホンカモシカは、一九七四年八月二十五日に雌一子がうまれ、近く一歳になりました。目下、我国には三匹のニホンカモシカが居りますが、すこぶる健康状態は良好です。ニホンカモシカが我国において繁殖ができたのも、一重に山岳博物館、長野県、上野動物園及び我国の飼育係人の共同努力に他なりません。」

ニホンカモシカが我国に進出して、繁殖したことは広く観光客や関係者の深い関心を受けています。私達は、大町市民が共に我国の三匹のニホンカモシカに寄せられる関心に対し、誠に感謝をしています。

北京動物園よりのメッセージ



北京動物園よりのメッセージ



北京動物園のカモシカ右より太郎・子・辰子 (NHK提供)

博物館だより

カモシカ「町子」と赤ちゃん死亡

昭和46年に当館で飼育中の大助・あつ子の間に生れた町子は、本年7月18日メス1頭を出産したが8月8日急死し、赤ちゃんも9日夕死亡した。死因については現在検査中です。

山と博物館 第20巻 第8号
 発行所 長野県大町市7-1-1 ②〇二一
 印刷所 大町市下町 山岳博物館
 定価 年額四〇〇円(送料共)(切手不可)
 郵便振替口座番号(長野一三、二九三)